

報告者は一介の非宗教者であり、曹洞宗の檀家ではあるが、普通のいわゆる無宗教的な仏教徒である。そういう立場から、個人的には宗教の公共性といった議論をありがたく聞いている。今回はお参りツアーとカレンダー企画の報告をする。

報告者は今は岡田真美子氏等と一緒に色々な活動をしているが、もとは流動層工学・粉体工学が専門で、たとえばボイラーやプラスチックを作る技術、エネルギーにも関係があり、基礎からプラントまで色々とやってきた。その立場でこの東日本大震災を見ると、地震、津波、液状化、原発の冷却停止、爆発、放射性物質の除染など、全部粒子・流体に関わっている。報告者自身もがれき処理の視察等で数回被災地に入っているが、相馬を訪問した時に線量計を持って測りながら行ったところ、霊山を通る道に沿って上がっていくと、カーブのきついところで線量が上がる。風で雲が登っていく時に、道が曲がる所で粒子がついていけずに遠心力で降り積もるのが原因だが、そういう体験をして自分の専門との深い関わりを感じた。除染時に高圧ジェット水流による屋根の洗浄が多く為されたが、周りをしっかり囲って徹底的に水滴等を外へ出さないようにするという、アスベスト除染の時にできたルールが全く生かされず、たくさんの方が被曝されたのは非常に残念である。

お参りツアーは現在のところ実現しておらず、どなたかできる方がいれば是非お願いしたい。昨年の情報交換会でお参りツアーの報告をした学生のH君を東北の現地に送り込み、祈りの施設となり得る場所を掴んできてもらおうとしたが、彼は「わからない。混乱した」とのことで葛藤を抱えて反省の時期にあり、当初の目的を果たせていない。学生を組織して計画を立て、ある程度のお年のお金のある方等に広く呼び掛けてツアーを組むという考えで、旅行会社も非常に乗り気だったが、教育的な立場から学生にチャンスを与えるという趣旨でもあったので、追求しないようにしている。この問題は苦しい体験の有無や、色々な文学との接触等、想像力のようなものにかかなり依存するのではないか。

気仙沼方面で支援活動をしている早稲田の学生グループと話す機会を得たが、その中の19歳の女子学生に「どこかで祈る気持ちになったことはあったか」と尋ねると、彼女も、活動に参加したにもかかわらず、「よくわからない。私は頭が固い。想像力がない」と答えてきた。支援活動に参加したからといって、必ずしも本当に気持ちが通じるわけではないということを実感した。報告者は、大槌町で祈る場所が無いはずは無いと思うが、それを感じられない人もたくさんいる。おそらく体験、想像力だけではなく、心のはたらかせ方の習慣のようなものが大事なだろうと思う。そういう意味で、この宗援連に参加する皆さんの仕事はやはり大きいものがあるのではないか。

その後、何かできないかと思い、2011年を忘れないというカレンダーを作った。兵庫県立大学の合田博子氏のお嬢さんと報告者で絵を作り、12のことばを選んでそこにちりばめた。これは報告者の仕事の関係等、色々な専門家達がこういうものに対してどう気持ちを働かせるかということに興味を持ち、ことばを共有できる場所を作りたいと考えたためである。本当に一年中見てもいいと、皆さん囁みしめてくれている。

この一年でたくさん出てきたこれらのことばは、直接宗教ということにはならないかも

宗教者災害支援連絡会 第8回情報交換会議事録 H24年3月18日 (文責：井関大介)
「東日本大震災発生以後の1年を顧みて」
堀尾正韜氏 (龍谷大学)

しれないが、宗教の最も根底的なものに関係しているのだろうと思い、これからも大事にして意識していきたい。2013年はどうしようかと今から悩んでいるが、これを2千部刷り、1700部皆さんにひきとっていただいて少し差額ができたので、また次に何かしたい。

問題はあまりにも大き過ぎ、個々の市民も大事だと思うが、現地でたくさんの活動をしている専門家達、実務家達もやはり祈る気持ちを求めているはず。日本の色々な場所、色々な国民レベルで祈る気持ちを求めていると思うので、ぜひそういう広い視野のもと、宗教者の皆様の新しい活動を展開していただけると、一般市民としては嬉しく思う。